資料

福祉の魅力発信プロジェクト
報告

2022.5. 20.

坂本・大澤

福祉の魅力発信プロジェクトの紹介をさせて頂きます。
自立支援協議会の大澤です。
坂本です。
よろしくお願いします。

〈今日の流れ〉

1　アンケート調査

2　ヨコヨコ note

3　ヨコヨコ 冊子

4　今後に向けて

今日はこのような流れで報告します。
昨年度の福祉の魅力発信プロジェクトでとりくんだことについて…
１、まず、障害福祉の仕事に対する学生のイメージを調査しました。
２、魅力発信としてのヨコヨコというメディアについてお話をします。

1　アンケート調査

まず最初、アンケート調査を行いました。

障害福祉のしごとが、福祉学生・非福祉学生から実際にどのようなイメージをもたれているのかを把握するため、アンケート調査をおこないました。

障害福祉のしごとが、福祉学生・非福祉学生から実際にどのようなイメージをもたれているのか就職に対してどんな意識を持っているかを把握するため、アンケート調査をおこないました。
圏内だけではなく、全国の学生から100件を超える回答がありました。

アンケートから見えたこと（抜粋）

・福祉を選択肢にもっている人は意外と少なくない。同等に、福祉の仕事を一顧だにしたことがないという人も多い。どの層へとアプローチしたいのかを見定めていくことが大切。
・「福祉の仕事には資格が必要」というイメージがあり、「自分にはできない」という認識へとつながっている。
・就職において最も重視されている「仕事のやりがい」はあると多くの人に思われながらも、福祉の仕事は選ばれていない。その他の条件が、やりがいに「見合っていない」という感覚を生んでいるのではないか。
・福祉の仕事にはキツイというイメージがあり、障害福祉の仕事も身体的・精神的負担の大きいものと認識されている。これが大きな障壁になっていることは間違いない。
・人間関係は学生にとってかなりの重要度。
・約半数が福祉職の給与等の待遇が極端に悪いと思っていたり、キャリアアップのイメージももっていないなど、情報が正しく伝わっていない。

人材確保が厳しいと思われていると思うのですが、かなりの学生が、福祉を選択肢にもっている人も多かったです。
「福祉の仕事には資格が必要」というイメージがあり、仕事がきついという固定化されたイメージもある。

学生にとっては福祉に限らず職場の人間関係は学生にとってかなりの重要になっている。

約半数が福祉職の給与等の待遇が極端に悪いと思っていたり、キャリアアップのイメージももっていないなど、情報が正しく伝わっていない。

実際に個別インタビューでも聞かせてもらったが、キャリアアップのイメージがもてていなかった。

詳しくは、イメージ調査の報告会資料をご覧ください。

こちらの調査についてはデータなどの以前行った報告会の報告書を動画と同じページに乗せています。

2　ヨコヨコ note

ヨコヨコというメディアを始めました。

note

note というメディアプラットフォームを利用し、福祉ではたらく人へのインタビュー等をとおした魅力発信をはじめました。

〈インタビュー〉他の人にもできて、私にしかできない

69

ヨコヨコ
2021年9月1日 12:00

「私にしかできない」という固有の価値は尊いものに思える。しかし、私だけでなく「他の人にもできる」ということもまた、実はとても大切なことだ。障害福祉の仕事に携わり九年、古庄奈央子（42）さんは「他の人にもで

69

note というメディアプラットフォームを利用し、福祉ではたらく人へのインタビュー等をとおした魅力発信をはじめました。
ブログのような感じで、さまざまな人が寄稿できるものです。
インタビューの過程で自分自身が感じたことなども魅力発信として取り組んでいます。

HPにリンクを貼っていますので、ご覧ください。

社会的背景

福祉業界は、担い手の不足が深刻化しています。短期的な人材確保はもちろん重要ですが、長期的な目線で、限られたパイを業界内で奪い合っていくシナリオを脱し、パイそのものの拡大していくような未来・社会づくりに取り組むことが不可欠です。そのために、単一法人の枠を超えた協働・連携が必要であり、地域に根ざして連携を目指す協議会には、率先して人材面においても新たな取り組みに挑戦することが求められています。

このような取り組みを始めた社会的な背景としては、やはり担い手不足があります。
とはいえ、福祉に対する就職意欲をいきなり喚起するのは難しい。
より長期的な目線で考える。限られたパイを業界内で奪い合っていくシナリオを脱し、ゆるやかにパイそのものの拡大していくような未来・社会づくりに取り組むことができればと思います。

ヨコヨコ

ダイバーシティ＆インクルージョンの時代。性別、年齢、民族、国籍、宗教、障害の有無、価値観、ライフスタイル、あらゆる違いを尊重し、誰ひとり取り残さない社会を、夢物語に終わらせないために。

ヨコヨコは、「ともに生きる」を多様な人々と考えていくべく、大津市障害者自立支援協議会が昨年立ち上げたプロジェクト。障害福祉を切り口に、これからをよく生きるヒントを探索します。

コンセプトとしては、ダイバーシティ＆インクルージョンということに関心を持っている学生は多いので、そういう所に遡及できるようなものを考えています。

定量的にみると

3,204
全体ビュー

3
コメント

249
スキ

最新集計時刻 2022年5月20日 04:00

記事	ビュー	コメント	スキ
〈インタビュー〉他の人にもできて、私にしかできない	1,069	3	68
〈インタビュー〉そういうひとがいても、いいじゃない	456	0	32
〈インタビュー〉こんな俺でも：天職とめぐり会って	354	0	37
〈インタビュー〉背景を想像して、つながる	353	0	32
〈コラム〉学生の目に福祉はこう映っているらしい　後編	253	0	21
〈コラム〉ぼくたちは、ヨコヨコする：編集者のつぶやき その1	206	0	17
〈コラム〉学生の目に福祉はこう映っているらしい　前編	181	0	18
〈コラム〉学生の目に福祉はこう映っているらしい　中編	177	0	18
〈終了〉10/26㈫「これからダイアローグ」を開催します	138	0	6
〈お知らせ〉10/26㈫「これからダイアローグ」を開催します（削除済み）	17	0	0

このような形で反応をいただいています。
ただ、オンラインのメディアで、地域を越えて発信できるという強みがある一方で関西圏や周辺の人たちに届かせていくためには、他の工夫もいるので、この後紹介する冊子づくりを考えました。

大切にしていること

共生社会においては、社会全体で福祉に対する意識が高まり、一人一人がより福祉的なあり方を暮らしのなかで実践していくことが大切です。福祉業界の人材確保への切迫感・焦燥感を理解しながら、福祉とより多くの人との関係をつくっていこうという大らかな視点をもって、ヨコヨコは発信に取り組んでいきます。

町の中で、より寛容に多様な人と様々な人とともに生きていける人を増やしていきたい思いで発信をしています。

3　ヨコヨコ 冊子

いま、まさに作成中で、来週、印刷が仕上がって、手元に届きます。

まだ関心をもっていない若者と福祉との出会いを生み、滋賀を中心とした関西圏の学生に取り組みをより伝えていくため、紙媒体のヨコヨコを作成しました。

オンラインのメディアは関心のある人は見つけてくれるが、関心がない人には届かない。
「たまたま」出会い頭に会うような人たちに手に取ってもらうために、冊子は有効だと考えた。

旅ごころで、はたらく

わたしたちは、限りある時間の多くを「はたらく」に費やします。
はたらくを選ぶことは、人生を選ぶことにも等しい。
職務はアイデンティティになり、職場はコミュニティになる。
無数の選択肢からの職業と会社の選択は、大変な賭けにも思えます。

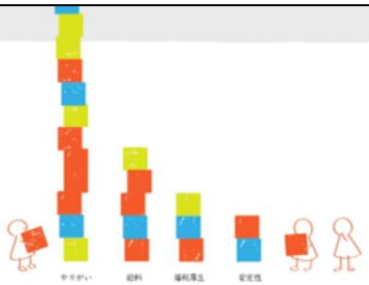
しかし、終身雇用は幕を閉じ、
生涯現役の人生100年時代に突入しようとしているいま、
どれほど深刻に一回の分岐を捉える必要があるのでしょう。

もっとおおらかに。もっとほがらかに。

人生はときに旅にたとえられます。
それなら、はたらくも旅ごころで。

こんな言葉があります。

「どんな旅にも、旅人自身も気づいていない秘密の終着点がある。」



しごとを選ぶとき、なにに重きを置くか。
人間関係、給与・福利厚生、安定性。価値観はひとそれぞれですが、
重視されるひとつに「やりがい」があります。

ヨコヨコが2021年春、全国の学生を対象に実施したアンケートでも、
やりがいを選んだひとは8割にのぼりました。

わたしたちはどうやってやりがいを感じるしごとと出会うのでしょう？

翻って障害福祉のしごとに目を向けてみると、8割以上が
「やりがいのあるしごと」というイメージをもっています。
ところが、実際には選ばれていないのが福祉。

やりがいだけでは生きられない？

はたらくとやりがいについて、ふくしではたらく3人にたずねてみました。

interview

「はたらく」という オリジナルの魅力を見つける旅

聞き手／大澤

「やりたいことはなんですか?」
に答えられることが評価される世の中。
でも、なかなか見つからないのがふつうなんだと思う。
自分探しの旅に出るように、
はたらくという旅をしたっていいのかもしれない。

はたらきながら、探せばいい

—— 小西さんにとっての「はたらく」を教えてください。

小西　はたらくって、その意味を見つける40年の旅かなと。

—— 旅ですか! 意味があるからはたらくのではなく、意味を見いだすためにはたらく?

小西　単純にわたし自身が、しごとのやりがい、福祉のしごとの魅力を探す旅の途上なだけなんですけど(笑)　やりがいや魅力って、何年経ったら見つかるものなんでしょうね。先日実習生に「仕事のやりがいはなんですか?」と訊かれたんですけど、あんまりまだ見つかってないなって、正直。

—— すっごくリアル。

小西　「福祉にはこういう魅力がありますよ」
「こういう風なことが楽しいですよ」って、結局のところ、いままでやってきた人の価値観の押し付けとも言えると思うんです。
人と接するのにマニュアルがないように、福祉の世界の支援者も、百人いたら百通りのアプローチの仕方・関わり方があって、感じる魅力も百人百様だと思うんです。

—— 探す旅って、他の人の語る意味や魅力にとらわれず、固有の経験を重ねているというとてもポジティブなことなんですね。

魅力はのんびり見つけていく

小西　魅力は、決まってあるものではなく、自分自身が見つけていけるものじゃないかなと。だから「こういう楽しさがありますよ」ではなく、「その楽しさは、あなたがここではたらいたら見つけることができますよ」と、福祉に興味をもってくれている人には言いたいです。

—— 生きること、はたらくことにすぐに答えを求めようとしなくていいんだなと、とてもこころが軽くなりました。

小西　仕事をしててよかったなと思うことはもちろんあるけれど、やりがいは「退職するときに見つかればいいかな」くらい長いスパンで考えています。一生かけて何かを残していけたらなあ。これから出会うかどうかもわからない誰かのために、相談を繰り返して、残るは墓碑ばかりかもしれませんが(笑)

—— またまた(笑)　ぼくもこれからはちはち旅をしていこうと思います!

こにし　しょうや
小西 昌也さん　障害者相談・生活支援センター やすらぎ

たまたま実習した特別支援学校では就業現場を学んでいたが、身を粉にしてまで働く人を目の当たりにして、障害福祉へ。相談支援専門員として、障害者をもつ人に向き合う日々。

ホコタコ内ではインタビューの続きを読めます
https://note.com/yokoyoko_jp/sa

文字量が多いと学生は読まなかったりするので、テキストの量は絞り込んだ。
デザインは、過去にあった福祉のデザインと少し変えることで、これまで届かなかった層に届けることを考えている。

頼りにしてくれる人がいる

堀内　天職やと思ってるんです、訪問介護が！

――天職と言り合えるなんて幸せです…

堀内　はじめからそう思ったわけでなく、実は一度は逃げたんです。実際の訪問先のおばあちゃんが亡くなる現場に居合わせ、責任の重さに気が引けてしまって。異業職を経て介護職をはじめ、2つめの事業所で訪問と再見しました。

――出会ってきたもののなかに家外、通職の種があったりもするのかもしれませんね。

堀内　ある利用者さんに心臓マッサージしたときのことです。亡くなられてしまったんですが、救急隊員の方に「初期がとてもよかった」です。結果は残念でしたが、気を落とさないでください。」と言われました。ご家族も涙を流して「ホンマにいままでありがとうございました。」とお礼を言ってくださって。心臓マッサージって、後からなんかあったら自分のせいなんじゃないかみたいな意識も出てきて、実行するのに勇気と度胸がいるんです。でもみなさんの反応を受けて、本ガヤで通感ばかりかけてきたこんな俺でも頼られてるんやと感じました。この仕事をやってて良かったなと心から思います。

堀内 永央さん　訪問介護事業所つながり

心理学を学んでいた大学で、考えにくいケースの家族関係を結ばれたことこそが人間へ、現実に生き、

自分のペースにあったしごと

――仕事にやりがいはありますか？

高橋　障害福祉の仕事は、答えのないことをずっとやってるような仕事です。今日昨日で答えが出ないのが当たり前。私はそれくらいのペースがちょうど自分に合っていると思います。成果や売り上げを求められて急かされるのとは違う世界。一朝一夕で成果が出たり、答えが見つかるわけではありませんが、そこにやりがいを感じます。

――時間をかけて考え、悩むこともまた、「はたらく」のひとつのあり方なんですね。

高橋　障害のある方に関わりながら、「どんな人も生きやすい世の中ってどんな世の中なんだろう？」「お互いが分かりあうためには何が必要なんだろう？」といった、障害にとどまらない大切なことを考えつづけていければなと思っています！

たかはし　高橋 みず希さん　相談センターみゅう

大学・大学院で障害福祉を学び、2年ほどの就職での勤務を経て、生活の相談業をやっています。

編集後記

ぼくは福祉を勉強してきた人間ではありません。
そんなぼくにとって、「ヨコヨコ」という楽しげでしなやかな語感は、この2年ほどの福祉との関わりのなかでなんとなく味ってきた肌感と重なっています。ヨコヨコという適なその語感が、とてもしっくりくるんです。
福祉って、なんでしょう。いま思うのは、福祉にはこれからの社会をよく生きていくヒントがあふれているということ。これからもおおらかにぼちぼち、福祉の旗をつづけていきたいなと思います。／大津

ヨコヨコ

ダイバーシティ&インクルージョンの時代。性別、年齢、民族、国籍、宗教、障害の有無、価値観、ライフスタイル、あらゆる違いを尊重し、誰ひとり取り残さない社会を、夢物語に終わらせないために。ヨコヨコは、「ともに生きる」を多様な人々と考えていくため、大津市障害者自立支援協議会が昨年立ち上げたプロジェクト。障害福祉を切り口に、これからをよく生きるヒントを探索します。

ヨコヨコは、noteで発信をつづけています！
https://note.com/yokoyoko_otsu/

学生編集部員募集！

活動や取材もしながら、ヨコヨコを一緒につくってくださる学生メンバーを今年度から募集しています。お気軽にご連絡ください！

取材協力
障害者相談・支援支援センター やすらぎ／深ぎょ住者相談センター みゅう／訪問介護事業所 つなかり／
atelier kka-sansai／ひまわりは うち／伊勢宮公園 木陽

ヨコヨコ magazine Vol.1　2022年 5月発行　｜　発行 大津市障害者自立支援協議会　otsujirita@gmail.com　｜　編集 大津健　デザイン ふる

4　今後に向けて

今後にむけて

今後に向けて

- 作成したメディア（note、冊子）の活用

→冊子は5月から大学や飲食店等にも設置予定です。

- 採用への具体的導線は引きつづき検討

→面的な魅力発信として、各法人・事業所でご活用いただければうれしいです。

- インタビューは継続

→取材へのご協力お願いいたします。

- プロセスへの学生の参与

→学生編集部を募集し、取材等を学生と一緒におこなっていきたいと考えています。

- そのほかよりよい展開の模索

冊子をより良い形で届けていきたい。学生が出入りする飲食店などにも置いていきたい。
単一の事業所の冊子ではないけど、面的な魅力発信として、各法人・事業所でご活用いただければうれしいです。

今年度もインタビューは続けていきます。僕も話を聞かせていただいてたくさんの気づきがあるので、その過程を学生と共に
経験していきたい、そのプロセスを共有したいので、冊子を作ったりの過程も含めて学生と一緒にかんがえていきたい。
インタビューをすることで、答えてくださる方も「なぜ自分がこの仕事をしているのか」などを振り返って捉え直したりしていただける機会になればうれしいです。

（画面共有停止後）

（坂本）1年間取り組んで印象に残っていること。アンケート調査をした後、「これからダイアローグ」という報告会を行い10名くらいの市内の福祉事業所の方にご参加いただいた。
働いている人達からすると、「自分たちはこんなに楽しく働いているのに、学生たちにはこんな風に見えていたのか！」というショックがあったり、じゃあ、自分たちが楽しく働いていることをどんなふうに伝えていったらいいんだろうと考えた時に、大澤さんが「就職活動ってコミュニケーションなんですよね」と話してくださって、ああ、なるほど、と思いました。
私たちにとっては採用活動ですが、どうしても、採用したいという思いが先行する中で、一人の人と、ちゃんとコミュニケーションを取るということができていなかったかもしれない。「来てくれるか？」「きてくれへんか？」と思っていい所ばっ

かり言ってしまったりする。
福祉の職場説明会とかが「良く見せたい職場」と「良く見せたい学生」の虚勢の張り合いになってしまうようなところもあり、コミュニケーションが取れていなかったかもしれないと思う。

（大澤）今回も福祉の魅力発信というプロジェクトだけど、例えば小西さんのインタビューで僕自身の共感したところが、福祉っていうものの魅力が決まってあるわけではなく、そういうものをひとりひとりが、その魅力を見出していったりとか、魅力を自分自身が作っていけるという所は、学生や若い世代が見てて共感をもてるポイントだと思った。

最近すごく考えているが、どんな仕事を選んでもいいし、どこに住んでもいいし、自由な選択をできるようになっているからこそ、根っこをどこに貼っていいかわからない不安みたいなものが、自分の周りにいる若い人や学生を見ていても感じる。
求めているのって、その仕事に魅力があるかどうかだけではなくて、自分がその仕事をする意味を実感できるかとか、そこにいる意味を感じられるかとか、自分の役割を感じられるかとか…「自分と社会」とか「自分と福祉」とかいうもののつながりを感じられるかどうか、みたいなところだったりもするのかなと思ってて、
すごい華やかな魅力を見せる必要はなくて、採用のプロセスにおいても「こういうのが魅力です」って伝えるというよりも、ひとりひとりが、生きてきた文脈であったり、どういうことを思っているかということと、この仕事、法人、福祉が目指しているものを重ねて行って対話して、すごく時間がかかっていったりもするのですが、そういうことを少し丁寧にすることによって、今までの魅力発信とは違って、実際に学生がコミュニケーションの中で、「福祉の仕事をしてみたい」「ここで働いてみたい」という感覚を持つかなあという風に思っています。そういう風に相互に変容していくプロセスとして就職活動があると良いかなと思っています。
そういう人と向き合うっていうことは最も福祉が得意とするところだったりもするので、採用活動に広がっていくと良いかなというのが、「いちわかもの」としての実感です。

（坂本）はい。今聞いてていろいろ思い出したのですが、根っこをはれるという意味では本当に根っこをはれる仕事だと思うし、私たち、この業界で働いてきた人間が、こういう風に働いてきてこういう値を自分が張ってるということを伝えていくっていうのも、ひとつの選んでもらえる点になるかな。
それと、根っこを貼るということで言うと、滋賀県は糸賀一雄先生が近江学園をはじめられた場所ですが、私、以前、糸賀先生が鳥取かどこかで講演された音源をきかせてもらったことがあって、その時にちょうど、「子どもたちがヨコヘヨコへと生きる力の根っこを張り巡らせていくんです」というような話をされていて、「ヨコヨコ」という名前と「根っこを張り巡らす」ということが、いま、自分の中でつながったなと思いました。

ありがとうございました。

ぜひ、ヨコヨコの冊子を置いてくださる方は、自立支援協議会に連絡ください。